

I. 2020年度の総括（案）

岐生研事務局長 佐藤真

1. 2020年度：岐生研の研究・組織活動について

(1) 研究面

2020年度、コロナ禍のために、様々な活動が制限されました。そんな中で、春の学習会を延期にせざるを得ませんでした。そして、その後も行うことはできず、結局、春の学習会は中止となりました。3月～5月と学校が休校になったこともあり、実践も進めることができませんでした。

そんな中でも、サークルを開く中で、レポートの検討をしたり実践を報告したりという動きをつくることはできました。コロナ禍ならではの悩みを、参加者で考え合うなどということもあり、サークル活動の中での学習や交流の大切さを改めて感じられる年でもありました。

春の学習会はできませんでしたが、コロナ禍での実践等を載せた「かがり火175号」を出すことができました。それぞれの会員が行ったことを紙面で交流することで、それぞれの地域のサークルメンバー以外の会員の実践や考えていることを交流することができました。

「コロナ禍の中でも、何とか学習ができないものか」ということを模索し続け、秋には、リモートを併用しながら学習会を持つことができました。特別支援学級での実践レポートであることもふまえて、北九州から楠凡之先生に来ていただき、充実した学習ができました。初めての試みであり、運営面で不十分なことも出てきましたが、朝日大学のWi-Fi等の環境を生かしながら、何とか会場に来られない参加者の学習も保障することができました。「リモート参加者の班」をつくることで、班学習も保障することができました。これは、若手や足立先生の尽力によるところが大きかったということで、今後の明るい見通しにもつながります。また、もともと広い岐阜県ですから、岐阜市や可茂地域で行う学習会には、遠方からの参加は難しいという面もありました。「リモート併用での学習会」の成功は、そんな岐阜県の課題をも解決につなげていくことにもなりそうです。

レポートは、「生活指導」にも掲載されたものですが、可茂サークルでアドバイスを受けながら、実践してきたものでした。そして、この秋の学習会での分析を受け、さらに実践を進めたものを、東海北陸地区セミナーでの分科会にも出しました。サークルで、秋の学習会で、地区セミナーで、「リョウの中にいる猫ちゃん」などをめぐって様々な見方が出されました。レポーターはもちろん、参加者もとてもよく学べるレポートになりました。

全国大会（Zoom）には、岐生研からは運営側も含めて 名が参加しました。全国大会でも、日頃はなかなか参加できないけれど、リモートだからこそ参加できたという人もありました。それは東海北陸地区セミナーでも同じことが言えました。

岐生研の機関紙である「かがり火」は、春の学習会特集はできなかったものの、以下のように、予定通り、4号を発行することができました。

- かがり火175 コロナ禍での実践交流（春の学習会中止を受けて）
- かがり火176 全国大会（Zoom）特集
- かがり火177 秋の学習会（リモート併用）特集
- かがり火178 地区セミナー（Zoom）特集